

ヨシュア記 2 章—ラハブの人生に示された神の恵み

2:1 ヌンの子ヨシュアは二人の斥候をシティムからひそかに送り出し、「行って、エリコとその周辺を探れ」と命じた。二人は行って、ラハブという遊女の家に入り、そこに泊まった。 2:2 ところが、エリコの王に、「今夜、イスラエルの何者かがこの辺りを探るために忍び込んで来ました」と告げる者があったので、 2:3 王は人を遣わしてラハブに命じた。「お前のところに来て、家に入り込んだ者を引き渡せ。彼らはこの辺りを探りに来たのだ。」 2:4 女は、急いで二人をかくまい、こう答えた。「確かに、その人たちはわたしのところに来ましたが、わたしはその人たちがどこから来たのか知りませんでした。 2:5 日が暮れて城門が閉まるころ、その人たちは出て行きましたが、どこへ行ったのか分かりません。急いで追いかけたら、あるいは追いつけるかもしれません。」 2:6 彼女は二人を屋上に連れて行き、そこに積んであった亜麻の束の中に隠していたが、 2:7 追っ手は二人を求めてヨルダン川に通じる道を渡し場まで行った。城門は、追っ手が出て行くとすぐに閉じられた。 2:8 二人がまだ寝てしまわないうちに、ラハブは屋上に上って来て、 2:9 言った。「主がこの土地をあなたたちに与えられたこと、またそのことで、わたしたちが恐怖に襲われ、この辺りの住民は皆、おじけづいていることを、わたしは知っています。 2:10 あなたたちがエジプトを出たとき、あなたたちのために、主が葦の海の水を干上がらせたことや、あなたたちがヨルダン川の向こうのアモリ人の二人の王に対してしたこと、すなわち、シホンとオグを滅ぼし尽くしたことを、わたしたちは聞いています。 2:11 それを聞いたとき、わたしたちの心は挫け、もはやあなたたちに立ち向かおうとする者は一人もおりません。あなたたちの神、主こそ、上は天、下は地に至るまで神であられるからです。 2:12 わたしはあなたたちに誠意を示したのですから、あなたたちも、わたしの一族に誠意を示す、と今、主の前でわたしに誓ってください。そして、確かな証拠をください。 2:13 父も母も、兄弟姉妹も、更に彼らに連なるすべての者たちも生かし、わたしたちの命を死から救ってください。」 2:14 二人は彼女に答えた。「あなたたちのために、我々の命をかけよう。もし、我々のことをだれにも漏らさないなら、主がこの土地を我々に与えられるとき、あなたに誠意と真実を示そう。」 2:15 ラハブは二人を窓から綱でつり降ろした。彼女の家は、城壁の壁面を利用したものであり、城壁の内側に住んでいたからである。 2:16 彼女は二人に言った。「追っ手に会わないように、山の方へ行きなさい。三日間はそこに身を隠し、追っ手が引き揚げてから帰りなさい。」 2:17 二人は彼女に言った。「あなたが我々に誓わせた誓いから、我々が解かれることもある。 2:18 我々がここに攻め込むとき、我々をつり降ろした窓にこの真っ赤なひもを結び付けておきなさい。またあなたの父母、兄弟、一族を一人残らず家に集めておきなさい。 2:19 もし、だれかが戸口から外へ出たなら、血を流すことになっても、その責任はその人にある。我々には責任がない。だが、あなたと一緒に家の中にいる者に手をかけるなら、その血の責任は我々にある。 2:20 もし、あなたが我々のことをだれかに知らせるなら、我々は、あなたの誓わせた誓いから解かれる。」 2:21 ラハブは、「お言葉どおりにいたしましょう」と答えて、二人を送り出し、彼らが立ち去ると、真っ赤なひもを窓に結び付けた。 2:22 二人は山に入って行き、そこに三日間とどまって、追っ手が引き上げるのを待った。追っ手はくまなく捜したが、見つけ出すことはできなかった。 2:23 その後、二人は帰途につき、山を下り、川を渡って、ヌンの子ヨシュアのもとに戻り、自分たちが経験したことを一部始終報告して、 2:24 こう言った。「主は、あの土地をことごとく、我々の手に渡されました。土地の住民は皆、我々のことでおじけづいています。」

導入

先週から新たな学びのシリーズを始めましたが、その中で、ヨシュア記を学ぶべき理由が少なくとも4つわかりました。

1. この書は、神がアブラハムに与えられた約束の成就です。（創世記12：7）この書は、神がご自身の約束を誠実に守ってくださることを強調します。
2. この書は、「神の聖さ」を教えてください。神はご自身の民を用いて、その土地に住んでいる人々の罪を裁かれました。（申命記20：16-18）
3. ヨシュア記は、現代のクリスチャンの生き方について多くを教えてください。ヨシュアが直面した問題の多くは、現代の私たちにも共通のものです。ヨシュアは、神のことばに「信仰」を置いて行動しなければなりません。私たちも、クリスチャン生活における勝利を収めたいなら、同じようにする必要があります。
4. すべてのみことばは、神の靈感によって書かれています。ですから、ヨシュア記は神のことを私たちに教えるために、神によって記された書物です。私たちが学んだことを実生活に応用するなら、成熟したクリスチャンとなれるでしょう。

先週、ヨシュア記 1 章の学びで、おもに 3 つのことを学びました。

1. 神は、ヨシュアにカナンの地を約束なさいました。（創世記 15：18）
2. 神はヨシュアをふたつの方法で励ましてくださいました。まず、ヨシュアは一生誰にも倒されないと神が約束してくださいました。次に、ヨシュアの行くところにはどこにでも神のご臨在がともにあると約束なさいました。最後に、神の民はヨシュアを支持すると約束しました。
3. 神はヨシュアに、神のみことばに思いをめぐらし、律法の書（聖書の最初の五書）に記されたことを行うようにと命じられました。

では、ヨシュア 2 章の学びを始めましょう。

2 章では、いくつかの出来事が起こります。その中で、スポットが当てられるのは 8-21 節です。この部分には、ラハブの告白とそれに基づくラハブの行動が記されています。今日はこの箇所を中心に学びましょう。

その核心部分に触れる前に、2：1-7 節から話の成り行きを知る必要があります。

1. ヨシュアは、約束の地を偵察するために斥候を送りました。（1-7 節）

ヨシュアがカナンの地に入ったときから、40 年が経っていました。当時、ヨシュアは約束の地を偵察する 12 人の斥候のひとりでした。12 人のうち、良い知らせを持ちかえたのはたったふたりでした。そのふたりが、ヨシュアとカレブです。ヨシュアは前回の結果を踏まえて、斥候はふたりで十分だと判断したのかもしれませんが。

ヨシュアは、カナンでの勝利を神から約束されていましたが、気を抜かず、偵察のために人を送り、とくにエリコを調べさせました。エリコは城壁で囲まれており、攻めるのが困難な町でした。

ふたりの斥候は目的地に着くと、城門の開いている日中の間に町へ入りました。ふたりは、ラハブという遊女の家を訪ね、その晩そこに泊まることにしました。

ラハブは、旅人のための宿泊施設を運営していたようです。町を訪れる外国人のためのホームステイのようなものでしょう。遊女ラハブと呼ばれてはいますが、このとき遊女であったとは限りません。おそらく、過去にそうであったということでしょう。というのも、6 節によると、亜麻の束を

集めて屋根の上で乾かして、商いをしていたようだからです。男性2人を隠すには、相当な量の亜麻が必要だったでしょうから、それがラハブのおもな職業のようです。

ラハブには過去に汚点があったものの、すでに以前の生き方を悔い改めていたようです。糸や布を作るための亜麻を集めたり、宿の経営をしたりして生計を立てようとしていました。

私たちにわかることは、神がラハブの心をご存じであったことと、彼女がまことの神を求めていたことです。

2節には、斥候たちがラハブの家に入るのを目撃したか聞きつけた者があり、それをエリコの王に報告したとあります。

3節で、エリコの王はラハブのもとに人を遣わします。そして、ラハブのもとに宿泊しに来たふたりの男を引き渡すようラハブに命じました。王は、そのふたりがあたりを偵察に来たスパイだと聞いたからです。

ラハブは王の命令を聞くとすぐに、ふたりの男の身を隠します。そして、確かにそのような宿泊者が来たけれども、暗くなると城門が閉まる前に出ていったと答えました。そして、まだそう遠くには行っていないだろうから、追いかければ追いつくだろうと勧めました。

しかし実際には、屋根の上で乾かしている亜麻の束の間にふたりを隠していました。

そのことを知らない王は、斥候を捕らえるために追手を遣わし、そのあとで城門を閉めました。

0. ラハブの告白と行動 (8-21 節)

9節 ラハブは、神の民について聞いたことがありました。一神の選びの民についての噂が広まっていた。ラハブは宿を経営していて、そこには外国の旅人が宿泊しました。その人たちが神の民について直接見たことをラハブに話したのでしょう。ラハブは、神がイスラエルの民にその地を与えられたという契約について知っていました。

10節 ラハブは、神の力について聞いたことがありました。—イスラエルの神が「葦の海」を干上がらせたことも聞いていました。また、アモリ人の二人の王、シホンとオグを滅ぼしたことも聞いて知っていました。

ラハブは、このようなことができる神の力について聞いていました。その上、その話が人々を恐れさせていることに気づきました。人々はおじけづき、その心はくじけたとみことばは語ります。つまり、イスラエルの神に何をされるかと恐れおののいたということです。

11節 ラハブは、ユダヤ人の神は、天地を治める全能の神だと言いました。この神こそ、宇宙の主権者であり、地上のすべてを支配しておられる方だと断言します。彼女は、力ある神を告白しました。

9節 ラハブは、この全能の神を信じました。ラハブは9節で、「私は知っています」と言いました。そこに疑問はありません。ユダヤの神について確信を得ていました。この町でラハブは、唯一まことの神を信じるたったひとりの人でした。もしそのことが知れたら、殺されるかもしれません。

ラハブは、心から偽りなくこの神を信じました。

適用

クリスチャンの少ない日本で、学校や職場、家庭にも、他にクリスチャンがいない状況で、たったひとりまことの神を信じるのはさびしいときがあるでしょう。聖書の神をばかにする人も中にはいるかもしれませんが。もしそんな環境にいるなら、信仰をもって耐え忍ばなければなりません。イエス・キリストにあって与えられた立場を信じなければなりません。

あなたは、自分が置かれた場所に輝く世の光です。

マタイ 5 : 14-16

5:14 あなたがたは、世界の光です。山の上にある町は隠れる事ができません。 5:15 また、あかりをつけて、それを柵の下に置く者はありません。燭台の上に置きます。そうすれば、家にいる人々全部を照らします。 5:16 このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。

あなたの周囲の人たちにとって、唯一差す光はあなたからの光です。それを受け取るかどうかは、その人たち次第です。

あなたは、周りの人たちにとって、地の塩です。

マタイ 5 : 13 あなたがたは、地の塩です。もし塩が塩けをなくしたら、何によって塩けをつけるのでしょうか。もう何の役にも立たず、外に捨てられて、人々に踏みつけられるだけです。

聖書が書かれた時代、塩は高価なものでした。塩は、肉を新鮮に保つために用いられました。クリスチャンの光を世に輝かせようとするなら、私たち自身が神のみことばに親しみ、祈りの時間を持つことで、イエスとの関係を新鮮に保つ必要があります。

あなたの宣教地は、神が今あなたを置いてくださった場所です。他の場所に召されるまで変わりません。

6 節、15 節 ラハブは神に仕えました。—ラハブは斥候たちの身を隠し、綱を下して窓から逃げられるようにしました。ヤコブ 2 : 25 を読みましょう。

ヤコブ 2:25 同様に、遊女ラハブも、使者たちを招き入れ、別の道から送り出したため、その行いによって義と認められたではありませんか。

ラハブを救ったのはその行いではありません。彼女の行動は、心の信仰の表れだったのです。

私たちが神の目に義とされるのは、イエス・キリストとその御業を信じる信仰によってのみです。しかし、私たちが義としてくれる信仰には、たいてい行いが伴います。

では、ヤコブ 2 : 18,20 を読みましょう。

2:18 さらに、こう言う人もあるでしょう。「あなたは信仰を持っているが、私は行いを持っています。行いのないあなたの信仰を、私に見せてください。私は、行いによって、私の信仰をあなたに見せてあげます。」 2:20 ああ愚かな人よ。あなたは行いのない信仰がむなしいことを知りたいと思いませんか。

ここ OIC の私たちは、自ら問いかけなければなりません。私たちの行いと生き方は、イエス・キリストを信じる信仰を示しているでしょうか。私たちの身代わりにイエスを十字架で死なせるために天から送ってくださった全能の神を信じる信仰を示しているでしょうか。その信仰によって救われているでしょうか。

ラハブ以上に、このことを考えさせられる例はありません。彼女は、命の危険を冒して、神の民を助けました。こうしてついには、彼女自身が神の民によって救われます。

21 節 ラハブは言われたとおりに、窓に赤いひもを結びつけました。—ラハブ一家の安全を保証するために斥候たちが出した条件は、斥候たちを逃がした窓に赤いひもを結びつけることでした。彼女はすぐに従いました。斥候たちが去ってすぐに、ラハブは窓に赤いひもを結びつけました。赤いひもは、斥候たちとラハブの間で交わされた約束のしるしでした。

教会の教えでは昔から、この赤いひもはイエス・キリストの血の象徴だと言われています。

聖書全体を読むと、創世記のアベルの血から始まって、新約聖書のイエスの血に至るまで、聖書の随所に血が登場します。

ラハブが窓に結びつけた赤いひもと、エジプトで死の使いが全土を通り過ぎた際にユダヤ人の家の門柱と鴨居に塗られた子羊の血には、注目すべき共通点があります。

エジプトでは、家の門柱と鴨居に子羊の血が塗られていない家庭では、長子がすべて死にました。エリコでは、窓に赤いひもがついていない家の者は、全員死にました。

ラハブの話は、神の恵みを物語る美しい話です。

ラハブは、ユダヤ人の神について聞いたことしかありませんでした。今日、私たちには聖書がありますし、歴史からも信じるに足る証拠の数々があります。

ラハブは遊女でした。自らの罪深い行いが過ちだと知り、罪を捨てる努力をしていました。彼女は悔い改めていたのです。

ラハブは、赤いひもによって、ユダヤ人の神が救ってくださると信じました。今日、私たちには赤いひもよりすばらしいものがあります。神のひとり子イエス・キリストの尊い血潮が流されたことを信じることができます。

しかし、私たちはその信仰を働かせて、自分のことと捉えてイエスを心から信じる必要があります。

そうすれば、神は私たちの心を知り、赦しが与えられたという確信を与えてくださいます。すると、このすばらしい神に仕えたいと思うようになるでしょう。

ラハブは、神を信じて、斥候が言ったとおりに窓に赤いひもを結びつけました。この話のすばらしいところは、ラハブは信じたことで神の御怒りから救われ、さらに、イエスにつながる系図に名を連ねたことです。ラハブは神の恵みによって、アダムからイエス・キリストにつながる「王族」のひとりと結婚することができたというわけです。

では、マタイ 1 : 1-5 を読みましょう。

1:1 アブラハムの子孫、ダビデの子孫、イエス・キリストの系図。 **1:2** アブラハムにイサクが生まれ、イサクにヤコブが生まれ、ヤコブにユダとその兄弟たちが生まれ、 **1:3** ユダに、タマルによってパレスとザラが生まれ、パレスにエスロンが生まれ、エスロンにアラムが生まれ、 **1:4** アラムにアミナダブが生まれ、アミナダブにナアソンが生まれ、ナアソンにサルモンが生まれ、 **1:5** サルモンに、ラハブによってボアズが生まれ、ボアズに、ルツによってオベデが生まれ、オベデにエッサイが生まれ、

イエス・キリストの系図にラハブが登場するのは驚くべきことです。彼女は異邦人で、かつては異教の神を拝む者でした。また、遊女という過去もありました。

ローマ 5 : 20 律法が入って来たのは、違反が増し加わるためです。しかし、罪の増し加わるころには、恵みも満ちあふれました。

ラハブは、ヘブル 11 章に綴られた信仰の英雄の中に登場するたったふたりの女性のひとりです。サラの信仰が 11 節に記され、ラハブの信仰は 31 節に記されています。ふたりとも、生ける神を信じる信仰を働かせました。

ラハブについてもっとも重要なことは彼女の「信仰」です。

ヘブル 11:6 信仰がなくては、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられることと、神を求める者には報いてくださる方であることを、信じなければならないのです。

同じように、私たちについてもっとも重要なことも「信仰」です。

私たちは、イエス・キリストのみに信仰を置いているという確信が必要です。

こういうわけで、イエス・キリストは主の晩餐、つまり聖餐式を始められました。

イエス・キリストが私たちに常に覚えていることを望まれるのは、イエスの「死」です。このお方の「死」が罪の赦しと永遠の天の故郷を私たちに与えてくれたのです。

神は、ラハブをご自身の目的のために用いられました。この神は、私たちのことも用いてくださいます。過去の宗教や道徳観は関係ありません。

ラハブの話を終える前に、コリント第一 1 : 26-29 を読んでおきましょう。

1:26 兄弟たち、あなたがたの召しのことを考えてごらんください。この世の知者は多くはなく、権力者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。 1:27 しかし神は、知恵ある者はずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者はずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。 1:28 また、この世の取るに足りない者や見下されている者を、神は選ばれました。すなわち、有るものをない者のようにするため、無に等しいものを選ばれたのです。 1:29 これは、神の御前でだれをも誇らせないためです。

22-24 節 斥候はヨシュアのもとに帰り、報告しました。

斥候たちはイスラエルの民のもとに帰り、ヨシュアに報告をしました。40 年前と違い、斥候たちは、神がこの地を陥落させてくださるという意見で完全に一致していました。神は、創世記 12 : 1-3 でアブラハムに約束されたことを成就しようとなさっています。

神は、悔い改める人に「恵み」を示してくださいます。しかし、この場合はたったひとつの家族だけがそれに与りました。ラハブがイスラエルの神について知っていたなら、他の人たちも知っていたに違いありません。ラハブと他の人たちの違いは、ラハブは悔い改めたが、他の人たちは罪を悔い改めようとしなかったことです。

聖餐式のメッセージで、「悔い改め」について学びました。これは、天国につづく道への第一歩です。

罪を悔い改めて、イエス・キリストを自らの救い主として信じようと思いませんか。もしそうなら、今こそこのお方を信じるべきときです。